

作品ができるまで

まずは形作り(成形)。その後は陶芸館の職員が細部を整え、作品を完全に乾燥させ、素焼きをします。そして作品に薬品をかけ、本焼きをして完成。できた作品は取りに来てもらうか郵送(有料)でお届けします。今回は、手びねり(ひも作り)で作品ができるまでを紹介しします。



できたものは世界に一つ

完成した作品は自分の手元にしかない、世界に一つだけのものです。陶芸を始めるのに年齢は関係ありません。陶芸館はあなたの挑戦をサポートします。



500gの粘土を4等分にし、1つを丸い団子にする。



団子を手のひらでたたき1センチほどの厚さにする。竹べらで端を丸く切り取る。



粘土の一つを手のひらで伸ばしてひも状にし、②で作った土台に積む。



ひもを作り③の上に積み、継ぎ目をならす。もう一度繰り返し外側もくつつける。



分厚いので指で挟んで薄くする。弓で少し切り取って高さをそろえる。



大浦会館で定期開催の陶芸教室があり、母と一緒に参加したのが陶芸を始めたきっかけでした。普段土を触ることがないので土を触ると癒されます。親指に力を入れると、どんどん口が開いてくると、など力の入れ方で形が変わるのが面白いです。陶芸を通して自分と向き合うことができて、分かっていなかった自分の性格に気付くことができました。ろくろで作った一輪挿しの花瓶は、毎日使っているうちに色も変わってきて、青色からオレンジ色のグラデーションでとても気に入っています。



大浦地域の成生で生まれ育ち、小さい頃から海や田んぼで遊び、砂や泥、土によく触れていたのに関係のある仕事があったかと思っていました。定年がなく一生できる仕事は芸術かなと思いつつ、続けることも得意だったので陶芸の道に進みました。何もなかったから好きなものを自由に形作れることが陶芸の魅力です。陶芸館は陶芸を教えてくれる学校や施設にも劣らない設備が整っていて、陶芸の専門家が一人から教えるので舞鶴の宝だと思っています。指導の時は「こうした方がいい」など声を掛

ます。食器も自作のものを使っていて、花を生ける花瓶やご飯を食べるお茶碗が自分で作ったものなので、使うたびにうれしい気持ちになります。

大浦地域の成生で生まれ育ち、小さい頃から海や田んぼで遊び、砂や泥、土によく触れていたのに関係のある仕事があったかと思っていました。定年がなく一生できる仕事は芸術かなと思いつつ、続けることも得意だったので陶芸の道に進みました。何もなかったから好きなものを自由に形作れることが陶芸の魅力です。陶芸館は陶芸を教えてくれる学校や施設にも劣らない設備が整っていて、陶芸の専門家が一人から教えるので舞鶴の宝だと思っています。指導の時は「こうした方がいい」など声を掛



けたくなる時もあります。我慢してなるべく自由に作ってもらい、聞かれたら答えるようにするなど距離感を大事にしています。利用者から「こんなに夢中になったのは小学生以来」と言ってもらったこともあり、どんな悩みがあっても、土と向き合う時間は集中して無心になれる時間だと思います。子どもに戻ったような気持ちになれて癒されます。ぜひ陶芸館に来たことがない人は来てほしいですね。



INTERVIEW 陶芸館 館長 高井 晴美さん

陶芸を始めたころは成形だけで、仕上げは先生にやってもらっていましたが、講座を受講して最後の工程まで自分でできるようになりました。もっと陶芸が楽しくなりました。できないことが少しずつできるようになるのも陶芸の楽しさかなと思います。

INTERVIEW 陶芸館 利用者 佐金 鈴子さん



置いたときに安定するように底を研磨して、コーティング剤を塗って完成。



約1,230度で本焼きし、釉薬を溶かしてガラス化させる。ここで色が出る。



⑥で希望された色の釉薬(焼いて色が出る表面を覆うガラス質の薬品)をかける。



約800度で素焼きする。その後、置くときに接地する面には水剤を塗る。



むろ室と呼ばれる湿度の高い保管庫で時間をかけて乾かし、大体乾けば外に出し乾かす。

陶芸館職員に バトンタッチ